

小兒の腦症に就いて

醫學士 坂 内 益 藏

小兒が腦症に罹ります時は、熱だけ出ることもあれば、赤痢、疫痢、消化不良等の病氣に伴ふこともあれば、チフス等の傳染病の折に罹ることもあれば、腦に腫物等が出來た場合になることもあります。

どんなものを腦症と云ふのでありますかと云へば、先づ第一に、意識が不明瞭になつて、顔つきがぼんやりして、小兒の目はいつも涼しく美しいものであります、それが目に雲がかゝつたやうになります。其他に、小兒は強く泣いたり、痙攣を起したり、嘔吐を催したり、頭痛を訴へたりします。

このやうなのが刺戟症状といふのであります、腦症も重いになります、最初から眞症状を表して來ます。小兒はもう意識も何もなくなり、名をいから呼んでも聞えず、刺を皮膚にさしても氣がつかない、と云ふ程になるのであります。

かう云ふ病人が一家の中に出た時には、どう云ふ處置をとつたらよろしいか、それは醫者を招くのが

第一番であります、醫者の來る迄どうしたらよろしいでせうか。先づ取敢へず、灌腸をして、便通をよくし、一方、氷枕、氷嚢で頭を冷します。熱がはげしかつたら、心臟の上に氷をあてゝ置きます。この腦症の折に、親が非常に驚いて、抱いたり、名を呼んだり、水を飲ませたり、甚だしいのは、抱いて子供をふりまわしたりします。これは、非常に害になるのでありますから、靜に寝かして醫者の來るのを待つのがよろしくあります。ひきついただけで、小兒は死ぬものでは決してないのでありますから、あわてずに充分氣をつけて頂きたいと思ひます。

次には腦膜炎であるかないか、をどんな風にして決定してよろしいかをお話しませう。勿論経過をみればわかる事ではありますが、一週間も十日も経過ばかりを見ては、病人に對して不利益でありますから、決定をはやくしなければなりません。腦膜炎であるかないかは、腰椎穿刺、即ち脊髓に針を刺せばわか

るのであります。小兒に腰椎穿刺を行ふのが可愛いさうだなどと云つて居りますと、後悔をしたり、腦膜炎でも治療が出来るのでありますのに、手遅れてなつたりいたします。

腦症患者でも、必ず死ぬといふわけでもありませんし、治つてからも馬鹿になるといふわけでもないのでありますから、腦症にかゝつても、充分に努力することが、親としてのつとめ、醫師としてのつとめでありませぬ。

私は、腦症患者に非常に興味をもつて、此處十年間程、手にかけて居ります。昨年十月から只今まで、腦症患者の中で、十人死亡して、七人全快の成績を見ましたから、先づよろしい方だらうと思ひます。

八歳になる男の子が腦症にかゝつたのであります。が、醫者が或は赤痢と云つたり、或は肺炎と云つたりして、一向意見がまごまごませんでした。私は、どうも、其が腦症ではないかと思ひましたので、親の許を得て、腰椎穿刺を行つて見ましたら、腦症であることがわかりました。その子供は、只今は小學校の二年生に通學してゐますが、成績も極めてよく、其後健康がすぐれて居ります。

又、眼鏡屋の子供で腦症にかゝつたのがありまし

た。これは、非常に高熱で、あばれまわるものですから、マリアだらうと診断されてゐました。しかし、どうもマリアにしてはをかしいところがあるので、腦症を見つけてゐる經驗上、もしや腦症ではないかしらと思ひましたので、又例の腰椎穿刺を行つて見ました。すると、脊髄から多量の膿が出ました。小兒は膿をとると、氣持ちがよいと見えて、よく眠り、熱も下つて來るのであります。これは化膿性腦症といふのであります。腰椎穿刺を三度行ひました。二度目の時は、子供があばれるもので、助手の下手なから、うまくゆきませんでした。前後三回ですつかり治りました。このお子さん等は、普通の腦症だけでも非常に重病な上に、それに化膿までするのですから、その苦しさは見るに忍びぬ位で、兩眼は腦を侵されたがために、見えなくなつてゐました。しかし父親は、眼鏡屋といふ商賣上、小兒の眼を見て、之は病氣の恢復に伴ふてだん／＼よくなることを知り、私を信じて、治療を氣長にさせてくれましたので、昨年十二月より今年二月までの間に全快し、今は眼の方に勿論何等の故障ないのみか、腦力にも差異なく、學校に通つて居ります。親はいつも其の折を考へては感謝をして居るのです。

(文責在記者)